

## 研究概要

### 1. 研究名称 または課題名テーマ等

側弯症装具治療において、装具装着時間と装具治療からくるストレスは経時的に変化するか  
～装具治療 2 年経過の報告～

### 2. 研究責任者(当院)

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：大崎 美奈子

### 3. 分担研究者

所属：聖隷佐倉市民病院

氏名：木村 弘美、小谷 俊明、佐久間 毅

### 4. 研究対象者

新規で側弯症装具治療を開始する 10 歳から 15 歳の患児。

Cobb 角 20 から 40 度で頂椎 T7 以下。

装具治療 2 年経過もしくは、装具治療終了時点で、研究終了となる。

2021 年 9 月 1 日～2025 年 2 月 28 日までの対象者で 2 年経過の 62 名。

### 5. 研究の必要性

特発性側弯症において、Cobb 角 20 度を超えると装具治療が必要になる。基本入浴時間以外、20 時間以上の装着が治療効果として必要とされる。装着時間は本人、保護者からの聞き取りであり、信頼性があるとは判断しにくかった。そこで、2018 年に、ボタン電池式の温度感知器である、温度ロガーを使用しての装具装着時間の把握が可能であるか看護師で実践した。結果は、装具の腹部に温度ロガーを設置し、閾値温度 30°C 以上を装着時間として判断できると研究報告した。2019 年に、患児の装具の腹部に温度ロガーを装着し、温度ロガーは正確に装具装着時間を把握するためのツールとして有効性があると報告した。2020 年に、温度ロガーによる装着時間と併せて、聞き取りしていた装着時間を、患児にタイム表での装具を外した理由と時間を記入してもらった。比較検討することで装着時間に違いがあるか調査し、自己申告の方が実際の装着時間より長く申告する傾向であり、正確な装着時間の把握に温度ロガーの活用が望ましいと報告した。2021 年には、側弯症装具治療からくる心理的ストレスが報告はされているが、評価する指標が異なり、エビデンスとして明らかな報告は少ない。そこで、心理的ストレスを評価する、日本語版 JBSSQ-brace を用いてのアンケート調査をおこなった。結果は、約 3～4 割の患児が装具開始直後から中程度のストレスを感じていることがわかり、2022 年に、装着時間の実態と装着時間間に影響を及ぼす関連因子がないか、カルテ記事より後ろ向きに調査した。結果は、約 4 割が 20 時間の装具装着が困難であり、開始初期から後ろ向きな訴えがある患児は、装着が不十分となる可能性、時間経過とともに生活背景の変化があり、装具に難色を示す傾向であった。今回、62 名の対象者において、装具治療開始し、1 ヶ月後、6 ヶ月後、1 年後、2 年後の受診時におこなった JBSSQ-brace アンケート結果と温度ロガーによる装着時間を経時的に比較検討する。本研究の目的は、装具装着時間とストレス評価の関連性を把握することで、適切な看護介入のポイントを見極め、その後の診療への関わりを看護としてどう支援していくか調査する。

### 6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

温度ロガーの活用により、患児の装具装着時間が正確に把握でき、今後の装具治療効果の判断や心理的影響との関連分析に役立つ。看護として患児、保護者に対し装具治療時の身体的、精神的な関わりの適切な支援に繋がると考える。

### 7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1155

担当者氏名：大崎 美奈子

対応時間：平日 08：30～17：00